



宮台真司 著 『終わりなき日常を生きろ』

宮本 玄輝
Genki MIYAMOTO

大人たちは言う。「頑張れ」と。先生たちは言う。「頑張ればきつ」とい事がある」と。僕はうなずく。しかし、胸の内ではこう問い返している。「本当か?」「一体、何をどう頑張れというのか?」。そして「そんなの嘘だ」と。

しかし次の瞬間、僕は自分の言葉に見えぬふりをし、大人たちに精一杯うなずいて見せる。つまりは空虚な会話と上辺だけの言葉の数々。その安っぽさにうんざりしつつ、僕はいつの間にか飼い馴らされてゆく。

もちろん、そんな例ばかりではないだろう。僕が皮肉屋なだけかもしれない。しかし、善良な大人たちや友人に励まされ「頑張った」はずの子供たちが今日も日本のどこかで自らを死に追いやっていく。それが現実だ。それがこの世の一つの側面なのだ。

誤解しないでほしい。人を氣遣ったり励ましたりする事を否定している訳ではない。そんな励ましによって勇気づけられるケースも

あるだろう。しかし、それらの「頑張れ」が心の奥までは届かないで終わる事も少なくはないだろう。あの日の僕のように。

この「僕」とはそう、遙か昔の私、宮本玄輝自身の事である。

当時のある日、僕は本屋にいた。そんな僕の目に一冊の本がとまった。「終わりなき日常を生きろ」。

今でもなぜかは分からない。しかし、そのタイトルを目にした時、確信めいた予感が走った事を覚えている。気がつくと、夢中で読みふけていた。薄っぺらな建前を憎み、それでいながら本心をさらけ出す程の度胸も表現力もなかった当時の僕。大人たち、友人たち、そして社会との距離を測りあぐね、もがいていた当時の僕にこの本は一つの答えを与えてくれた。答えなど決してないという「答え」を。

「終わりなき日常」——このフレーズからしてニヒリズムがにじみ出ている。しかも結構濃厚に。それ故に誤解されがちだが、この

本は決して世の中に対し斜めに構え、ニヒリズムの陰に身を隠せと言っているのではない。逆だ！。生きていく上での真の力や強さを身につけると書いているのだ。しかし、このメッセージの届け方が通常とは逆なのだ。落ち込んでいる人間に「頑張れ」と言うのではなく、「ことごとん落ち込め」と冷たくあしらうかのように。

この本は決して隠そうとはしない。人が生きるとは、楽しい事よりも辛い事や退屈の方が多いう事を。昨日と変わらぬ今日が来て、今日と変わらぬ明日が来る事を。本当は誰もが気づき、そして気づかぬふりをしていただけの現実を。

著者、宮台真司は現代の日本を覆う閉塞感、いじめや自殺、恋愛、これら何一つ解決されぬまま流されゆく日々を「終わりなき日常」と表現している。

多少毒のあるメッセージかもしれない。しかし、当時の僕の胸にはスーツと落ちてきた。

この本は決して我々をどこかに導いてくれるものではない。むしろ更なる混乱に追いやられる可能性すらある。しかし、自分なりの答えを導く手掛かりを与えてくれたのだ。

あれから約二十年が経ち、自分なりに得た「答え」をここに伝えておきたい。

思うに、生きる力には二通りある。一つは誰もが言う、夢や希望

に向かつて突き進む力。そしてもう一つは苦しみや悲しみ、もしくは日々の退屈を淡々と受け止める力。世の中はわかりやすい前者だけを強調する。

暗雲の立ち込める向こうには、青空ではなく、更なる暗雲が待ち構えているだけかもしれない。

しかし、そんな不透明な時代にこそ、本当の強さや優しさが培われるのではないだろうか。

絶望から始めよう。きっとそれも悪くない。

